

「オールド・ウーマンズ・ネットワーク」における私のキャリア・パスとメンター カーリン・ツァウグ・ブラック（アメリカ）

私のキャリアもちょうど中ごろにさしかかりました。現在 40 歳の私が仕事をするようになってから 25 年以上が過ぎ、そして恐らく、今後少なくともさらに 25 年ぐらいは働くことになるでしょう。働く女性として私の日々やキャリア・パスを考えると時に思い出されるのが、若かりし頃の私にチャンスを与え、さらに現在の仕事に私を導いてくれたメンター（助言者）の皆さんです。

アメリカでは「オールド・ボーイズ・ネットワーク」というフレーズをよく耳にします。これは、過去長年にわたり、というよりむしろ、この国が始まって以来ずっと、職場、雇用決定、リーダーシップの役割を独占してきた年長の白人男性のことです。仕事の世界での成功が「人脈」に左右されるケースは多く、伝統的に男性は、自分と似たような別の男性を昇進させたり、そうした男性に助言したりしてきました。

アメリカの統計を見ると、全体的に多くの産業や職種がいまだに男性に独占されており、しかも、同一の仕事をしていても女性の収入より男性の収入のほうが高いということもしばしばです。この数十年にわたって展開されている女性の権利を求める動きでは、「同一労働、同一賃金」が絶えず求められ、官、民、非営利を問わず、アメリカのワーク・ライフの全てのセクターにおいて、女性の地位は向上しました。同一賃金についても進展が見られますが、私たちの生涯収益力はやはり男性より低く、これは子育てのために仕事を休む期間が男性より長いためです。

1980 年代に 10 代で働き始めた私は、職場で平等を求めて懸命に戦う女性から大きな恩恵を受け、また、こうした女性の中には私に助言やチャンスを与えてくれる人もいました。さらに、男性の上司からも同様に助言を受けました。まず注目すべきは私の父でしょう。私が 13 歳の頃、父は自分の小さな不動産屋で私を雇ってくれました。私はここで受付としてオフィス管理の数々のスキルを身につけました。また、私が 17 歳の頃には、家族ぐるみで付き合いのあるクリスティーナ・モリス氏が地元の放送会社で私を雇ってくれました。大学時代は夏休みなど 4 年間、この会社で働きました。この会社では経歴を積む上で意味のある貴重な経験を重ね、私の次の仕事への「飛躍」となりました。

クリスティーナはこの会社で副社長を務めており、「パワー」のある役職や指導的役割の女性は他にもいました。高い役職に就いた女性が後輩の女性の助言に時間を割き、スキルアップやネットワークの拡大を手伝いキャリアの階段を上らせることは、ある意味女性が「オールド・ウーマンズ・ネットワーク」を新たに構築しているということです。現在の

私の職業である「シアトル市経済開発局の広報担当部長」に私を採用したのは、そういったメンターの一人である、ジル・ニシ氏でした。この役職に応募するようにジルが私を誘い、私がこの職に就いてから 8 年が過ぎました。ジルはもう私の組織の部長ではありませんが、今でも私の相談相手であり、ネットワークの一部となってくれています。こうした専門的なビジネス関係を育て助言や応援を交換しあうことは、女性にとって重要なことです。

私のキャリアにおいて、男女に関わらず、そして日本でもアメリカでも、人材を育てようとする上司やメンターに私は恵まれてきました。若い頃は、神戸市役所の国際交流担当部局のコーディネーターとして、「語学指導等を行う外国青年招致事業(JET)」に取り組みました。神戸で働いている間も、目立つ仕事をするチャンスを私に与え、貴重な経験をさせてくれる進歩的な男性の上司が数名いました。また、現在の私の上司も男性ですが、私に励ましや応援を与え、新しいプロジェクトを手がけさせたり、やりがいのある新たな取り組みや継続的な学習の機会を設けて、スキルを伸ばさせてくれます。

一方で私は、私の組織の若い従業員がより多くのスキルを身につけ、キャリア・パスを成功させる機会を手にするよう、男女に関わらず助言するようにしています。私の下にはインターンがいます。これまで私の下で働いてきた 3 名の若いインターンの女性が、フル・タイムの職に見事に就きキャリアの道を歩み始めたことを、私は誇りに思っています。

私のキャリアにおける成功は、人材を育てようとする男性や女性のメンターに負うところもあったように思います。まして、新たな女性のネットワークを育てた女性のメンターのおかげであったことは言うまでもありません。日本とアメリカの両国の働く女性の未来に、私は大きな希望を持っています。これこそが両国で拡大を見せるコンセプトであると感じています。